

史遊会通信

No.213
平成24年10月15日発行

事務局
(03)
3712-0651
下山田方

例会のお知らせ

◎ 10月例会

日時 平成24年10月24日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室

講演 潘澤中氏
テーマ 「悪魔の政治力」～独裁者はなぜ政権を握り得たのか～

自由執筆 村上邦治・鯨游海の諸氏
締切 10月31日 厳守
11月例会

◎ 日時 平成24年11月28日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室
討論会 「私の邪馬台国」

司会 中山喬央氏

自由執筆 「今年感動した三冊の本」
全員(友の会員を含む)

締切 11月30日
字数 20字75行以内

江戸時代の前期に活躍した数学者の磯村吉徳について話をする。江戸時代の始では大名の移封はかなり多く、城や町を作るところから始まる場合もあった。丹羽光重が白河藩から二本松藩に寛永二十年に移封された。慶安三年に町割が完了すると、次は堀の普請と水源について検討することになった。翌年の承応元年(一六五二)に堀の普請も完了した。

二本松藩の山岡權右衛門は藩主に安達太良山の中腹を水源として城までの水道を進言する。この工事を進めるにあたって、山岡は當時名を上げてきた若い数学者の磯村吉徳を藩主に進言した。そのころの磯村は肥前鹿島藩

の鍋島正茂に仕えていた。二本松に着いた磯村は最初の測量の段階から参加した。

磯村は正確には分からぬが、寛永七年ごろに尾張国か九州の鹿島で生まれた。十歳代の前半に鹿島藩の関係者から数学を学んだという。寛永十九年(一六四二)数え年十三歳のころから毛利三高弟の一人である高原吉種に本格的に数学を学んだ。

正保四年(一六四七)数え年十八歳で鍋島正茂の家来になり、江戸で数学を教えるようになる。必要があれば鍋島家の領地である矢作にもしばしば訪れ数学を教えた。

磯村は江戸で数学を教えることは、二本松

藩に仕えるようになつても続いていた。まだ二本松藩の藩士になる前であつたが、江戸の町を歩いている時、大きな目立つ看板に数学を教えることが書いてあつた。磯村は何となく通り過ぎることが出来ず、中に入つて、中の数学者らしき人に会つた。何か数学の話でもしようとおもつたので、一つ二つ数学の難問を出してみた。話をしてみると看板の様子とは違あまい学力があるとは思えない。磯村は会話しても意味がないと、帰ろうと挨拶すると、この人は磯村を引きとめ是非自分を弟子にしてほしい、というので弟子にした。

祝出版

佐藤健一著

平成版『塵劫記』

（おもしろ算術書のすすめ）

明治書院

定価 一一〇〇円+税

すると序にこの計算法を教えてほしいといふ。どうしても、と言い誓紙を出して頼むので、その場であらましを説明した。この問題は『塵劫記』の遺題で、当時もその後も正確に求める方法はなく、近似的に求める方法を模索していた。磯村の方法もかなりの誤差があるので、よりよい方法を研究していた。これに磯村の研究を探り入れた総合的な（研究書）の日から何日かして、二本松に行かなければならなくなつた。磯村は先日教えた人の塾へ行き、これから田舎（二本松のこと）に行くことになつたが、前に教えた方法は誤差が大きいのでもう少し正確な方法を、帰つてから教えるので、前に教えた方法については公表はしないように、と云えた。

承応元年（一六五二）磯村は二本松にいた。ここへ初坂重春（または柴村盛之）が磯村を訪ねてきた。この二人は江戸で弟子になつた前述の人である。二人とも似たようにして弟子になつている。磯村が江戸に戻るのを待てずに、二本松までやつてきたのであるから、よほど急ぐことがあつたのであろうが、この時は磯村も忙しかつたらしく、教えることをしなかつた。

ここには磯村が公表を控えるように念を押した方法が出ていたのである。それどころか、何か所にも誤りがあつた。このことがきつかけとなつて磯村は『算法闕疑抄』をまとめ世に出すこととした。もともと多くの問題を集めた「雜數知分集」を作つていたので、これに磯村の研究を探り入れた総合的な（研究書）ともいえるものである。そのため後になつて増補版を刊行し、分りやすい順にしている。全部で五巻からできているが、三巻までで終わっている。四巻は「世間偽り之部」とあって、『格致算書』『円方四巻記』の誤りを述べている。

磯村が二本松藩士になつたのは万治元年で、安達太良山の中腹を水源とした用水が完成に近づくときである。この用水を二合田用水といい、城下の防衛、防火、灌漑用水、生活用水でもあつた。

磯村は江戸と二本松に多くの弟子があり、その中にはその時代を代表するような数学学者もいるが、当然のこととに初心者もいる。そのような人のために「うゐの子」と題する数学書を作つていた。当時流行っていた日用数学の本は『塵劫記』であつたが、「うゐの子」も『塵劫記』を参考にして書かれている。

初坂は『円方四巻記』を、柴村は『格致算書』を明暦三年（一六五七）に刊行した。そ

自由執筆

豫譲

森下 征二

豫譲はBC五世紀前半の晋（現在の山西省）の人である。彼は嘗て、晋の六卿の家柄である范氏や中行氏に仕えていたが、全くうだつがあがらなかつた。そこで次に、同じ六卿の一である智伯の許で仕官すると、智伯は彼の能力を認め、国士として厚遇してくれた。士は、己を知る者のために死す……。

豫譲が智伯に恩誼を感じたのは当然かもしない。

やがて、智伯はライバル趙襄子を攻め、その居城（晋陽城）を水攻めにしたが、逆に、今一步の所で亡ぼされてしまう。しかし、この時の水攻めは三年間に及び、飢えに苦しんだ城方は、互いに子を取り替えて食らい合う有様だった。恨み骨髄に達した趙襄子は、殺した智伯の頭蓋骨で豫譲杯を作り、夜な夜な酒を飲んで鬱憤を晴らしたと言われる。

ところで豫譲杯は、BC六世紀前後、ユーラシア大陸を席巻したスキタイ人の風習に起源を持つ。彼らは戦利品の分け前を得る為、

戦場で殺戮した敵の首級を王の許へ持参した。スキタイ王はその首の中から、勇敢な敵将の首を選び出し豫譲杯を作つた。即ち、頭骨の眉から下を鋸で切斷し、外側に牛皮を貼り付け、内側には金箔をかぶせた上、酒杯として使用したのである。この風習が瞬く間にチベット族を始めアジアの遊牧民族に広がつた。しかし、古代の中国には、ほかに豫譲杯の事例は見当たらないようだ。趙襄子の事例は、夷狄の婢だった母親の血が為す例外だったのだろうか？

私は一概に、そうとも言ひ切れないと思う。何故なら、趙襄子が活躍した時より千年も前、BC十五世紀の殷代の遺跡で発掘された膨大な人骨を知つてゐるからである。それは全て、上部を切断された頭骨で、しかも、その切り口はきれいに磨かれ、滑らかになつてゐる。おそらく、碗か杯にしたのだろう。もしもそなうなら、中国ではスキタイよりも遙か前に、豫譲杯の風習があつたことになる。

趙襄子の事例は、中国固有の伝統に基づくのかもしれない。

それはともかく、旧主・智伯の豫譲が酒器とされたことは、豫譲に深い衝撃を与えた。彼は智伯の無念を晴らすため、一途に趙襄子を刺して、おもむろに趙襄子の居城に潜り込む。豫譲は、名前を変え、自ら宦官と成る（宦官となつて）宮中の雜役夫となり、廁の中へ入つて掃除する傍ら、襄子を刺す機会を狙つた。

果たしてある日、襄子が廁へ入ろうとした。しかし、頻りに胸騒ぎがする。従士に命じて廁の中を改めると、懷に匕首を呑んだ豫譲を見つけ出した。尋問すると悪びれず、襄子を刺して智伯の仇を報いようとしたのだと言う。これに対し、襄子もさすがだった。暗殺が成功しても、豫譲に報いる者はいないではないか。彼の行為は將に無償の行為である。これを義とした襄子は、豫譲を放免する。しかし……である。それでも豫譲は復讐をあきらめなかつた。身体に漆を塗つて瘤を装い、墨を呑んで声をつぶし、乞食をしながら城下を徘徊して、再び襄子を討つ機会を狙つていた。

暫くして、襄子が狩に出た。好機到来と豫譲が勇み立つ。彼は、狩の帰途、襄子が渡るはずの橋の下に身を隠し、襄子の帰りをひたすら待つた。やがて、襄子が橋に差し掛かると、いきなり馬が棒立ちになつた。そして、幾ら責めても進まないのだ。襄子ははた

と思い当たる。良馬は主に危険が迫ると必ずこれを知らせると言う。さては、どこかに豫讓が潜んでいるに違いない。

かくして、豫讓の復讐は万事休した。面前に引き出された豫讓に向かつて、趙襄子は厳しい顔で言い渡した。お前は既に、私を二度まで刺そうとした。一度は、それを義として許したが、今度はもう許すことはできない。義士に報いのも、それで十分だと思う。

これに対し、豫讓が言うよう。臣聞く、明主は人の美を蔽わず。而して忠臣は、名に死するの義ありと。前に君、すでに臣を寛赦せり。天下、君の賢を称せざるはなし。今日のこと、臣、もとより誅に服せん。しかれども、願わくは君の衣を請いて之を撃ち、以て仇を報いるの意を致さん……と。

要は、襄子の衣を斬ることによって、仇を討つことに代えたいと言うのである。襄子はこれを義とし、衣を脱いで豫讓に与えた。豫讓の眼が爛々と光る。彼はいきなり剣を抜いて躍り上がり、裂帛の気合で衣に踊りかかった。一度、二度、そして三度……。趙襄子の面前で、彼の衣が切り裂かれる。襄子の顔が蒼白になる。彼は自分の身体に謂れのない痛みを感じていた。

事が終わり、豫讓が自ら刃に臥す。彼の身体から真っ赤な血が噴出した。すると……、実際に不思議なことが起つた。豫讓が流す血に混じつて、斬られた襄子の着衣からも、真っ赤な血がおびただしく流れてくるではないか。血が流れる。激しく流れる。水のように流れる血は、終に、それまで白かった石橋を、真っ赤に染めてしまつたのである。こんなことがあるのだろうか？ 襄子は且つ疑い、且つ怖れながら、何時までも橋のたもとで立ち尽くしていた。

考えてみれば、豫讓の復讐は髑髏杯から始まつた。斬衣が流す血の怪異で終わるのは、如何にも彼にふさわしいと思う。

昨年七月、私は早稲田大学の村山名誉教授

自由執筆

安祿山・史思明の乱（続）

中込 勝則

4、安祿山、暗殺される

至徳二載（七五七）正月、安祿山は、長子の安慶緒・宰相の嚴壯・侍臣の李猪兒の三人によつて、寝所で殺された。三人はそれぞ

の一行に加わり、山西省晋源区赤橋村に、豫讓橋と名づけられた件の橋の遺跡を訪ねた。しかし、既に橋もなければ川もなく、狭い道の真ん中に、槐（エンジュ）の大木がただ一本、空に向かつて聳えていただけであった。

どうやら豫讓橋は現在、この木の下に埋まつてゐるらしい。（帰国後、私は中国語教師・李明華老師「老師」と言つても、うら若い娘さんである。念のため）に依頼し、赤橋村の水利工事の経緯を調査して頂き、この事實を裏づけして頂いた。記して、感謝したい）。槐の木の傍らの、今にも倒れそうな観音堂の中で、「古豫讓橋」と彫り付けられた石碑を見つけ出したのが、せめてもの幸いだと言つべきだらうか。

れ祿山に怨みを持っていたからである。まづ、安慶緒の場合は、安祿山が側妾の段夫人を愛し、それに生ませた子の慶恩を嫡子にしようとしていたことをうらみに思つてゐた。嚴壯の場合は、祿山の下で宰相に登用されるなど信頼されてゐたが、祿山は晩年には糖尿病が悪化して目を病み、ほとんど見えないようになり、その苛立ちから生來の短氣がます

ます激しくなつていらだつことが多く、わざかなことを咎めて嚴壯をののしつたり鞭で打つたりすることがたびたびだった。嚴壯はころから祿山に仕えていたが、あるときふとしめたことで怒りにふれて陰茎を切りおとされた。その後も祿山に仕えていたが、これをふかく恨んでいつかは祿山の陰茎を切りおとしてやろうと心に誓つていたのである。この三人が寝所にしのびこみ、ろくに目が見えなくなつてきている安祿山を暗殺した。祿山は、自分を襲つた曲者たちが誰なのかわからぬうちに、その便々たる腹を刺し抜かれて死んだ。安慶緒は父の位を奪つて皇帝を僭称し、各地に官軍を破つた。

至徳二載（七五七）九月、郭子儀は、回紇（ウイグル）の力を借りて、ともに賊軍を攻めて長安を回復し、これによつて肅宗は長安に戻ることができた。玄宗もおくれて蜀から都に戻つた。同年十二月、官軍は、長安に次いで洛陽をも回復した。押された安慶緒は東に走り、河南省鄆城に軍を構えた。

乾元元年（七五九）、史思明も謀反の軍を挙げ、翌年正月には河北省魏州にて、大聖燕王を僭称した。同年三月、郭子儀・李光弼に

率いられた官軍は、安慶緒の鄰城を囲んだが、史思明の攻撃をうけて大敗し、囲みをといて軍をひいた。この後、史思明は安慶緒に手紙を送つて、二人で天下を二分して治めようといった。この言を信じて史思明の軍營にのこのこやつてきた安慶緒は、史思明によつて殺された。

7 甜に巻き込まれた杜

東北部だけであった。乱が平定されたとはいへ、この乱のよつて唐朝はすつかりガタが来て、力を借りた回紇族や吐蕃族の侮りを受けるようになり、彼らは国境を越えて都まで荒らしまわることもたびたびで、この撃退に忙殺されることとなる。さらに国内でも各地に叛乱がおこり、これにも手を焼いた。

唐朝はこの後百四十年余続くが、それは日が西の山に歿するように次第に輝きを失つていき、貞觀・開元の治のときのように四圍に武威を張つた世界的な帝国の面影は望むべくもなかつた。

7、乱に巻き込まれた杜甫

さて、杜甫のことであるが、「史遊会通信208号」に書いたように、安祿山が乱を起したのは、彼が念願の仕官が叶つたので疎開させていた家族を迎えに行つた直後のことで、以降、彼は動乱の中に叩き込まれ、辛酸をなめることとなる。長安幽閉・鳳翔の行在所へ向かつて長安脱出・左拾遺任命・房琯事件・華州への左遷など彼の運命はめまぐるしくかわり、ついには、家族の食のために官を棄てて甘肅省に流れ、そこも安住の地ではなくかつたので、蜀の棧道を越えて成都に漂泊していく。

自由執筆

ユスティニアヌス大帝と
その妃テオドラ

太田 精一

ローマ帝国の歴史を通してユスティニアヌス大帝ほど妻を愛し、その存在の大きさを感じさせた皇帝はない。

紀元前二七年、オクタヴィアヌスがアウグストゥスの称号を得てローマは、共和制から帝政に移行した。それ以来、東ローマ帝国の滅亡する一四五三年まで、東西合せて一七〇人余の皇帝を輩出している。

その中で、後世になって大帝の尊称付で呼ばれた皇帝は、コンスタンティヌス、テオドシウス、ユスティニアヌスの三人だけであった。

大帝と呼ばれた理由は、キリスト教、特にカソリック教会と関係が深い。キリスト教の受け入れと普及に特に貢献した皇帝をカソリック教会では、大帝と称したのである。

コンスタンティヌス大帝は、キリスト教を公認した最初の皇帝であり、テオドシウス大帝は、キリスト教の中でもカソリックだけを

正統と認め、他の宗教は異教としている。

ユスティニアヌス大帝は、東ローマ帝国の皇帝であつたが、カソリックのキリスト教を奉じ、三大事業を成し遂げている。

その一つにアヤ・ソフィア寺院の建設がある。首都コンスタンティノープルに建設された同寺院は、聖母子に捧げられた建造物で、これまでにない雄大かつ壯麗な教会であった。コンスタンティヌス大帝が、ローマにてた聖ピエトロ大聖堂をはるかにしのぐものであつたといわれている。

二つ目は、「ローマ法大全」を完成させたことである。キリスト教を国教とするローマ帝国に必要かつ有効な法律を編纂するとともにローマがキリスト教化する以前の法律も取り入れ、ローマ社会の法を体系的に整備した。

だが、折角編纂されたこの「法大全」もラテン語で書かれていたため、その後、ギリシャ語が一般的となつた東ローマ（ビザンティン）帝国内では、活用されなかつた。

ユスティニアヌス大帝の業績の三つ目は、西ローマ帝国領の再復である。

三九五年、ローマ帝国が東西に分裂して以来、八一年たつた四七六年、西ローマ帝国は

滅亡した。その五一年後の五二七年に即位したユスティニアヌス大帝は、同郷のバルカン出身のベルサリウスを登用し、ササン朝ペルシャを攻略、勝利のうちに和睦した。

東方を固めたユスティニアヌス大帝は、ベルサリウスをアフリカに派遣。ヴァンダル王国を倒し、ついで西ゴート王国からイベリア半島の東南端を奪つた。

その後、イタリアに君臨するゴート王国を滅亡させ、東西に分裂する以前のローマ帝国の領土をほぼ回復するまでに至つたのである。

ユスティニアヌス大帝は、伯父のユスティヌス一世と同じくバルカン半島の農村の出身であつた。アナスタシウス帝のもとで軍人として出世した伯父の縁故により、貴族に列せられた。伯父は、その後皇帝となつたが、その伯父に実子がなかつたため、帝位を引き継いだのである。

貴族の仲間入りをしたユスティニアヌスは、当時天下一の美貌と評判の高かつたテオドラを見初め、東方の財を惜しげもなく与えて、妻に迎えようとした。

だが、東ローマ帝国の元老院議員は、出自

の卑しい女性や遊芸を職業とする女性との婚姻を法律で禁じている。

また、伯父ユスティニアヌス帝の皇妃ルキビナも、信心深い母ヴィキランティアも反対であった。

その理由は、テオドラは、美しく知性的であるが、高慢で身持ちが悪い。結婚によつてユスティニアヌスのキリスト教への信仰心が揺らぐのではないかと懼れたのである。

ユスティニアヌスは、周囲の反対の声が、沈静化するのを待つた。そのうちに最大の障壁となつていた皇妃ルキビナが他界した。彼は機を移さず、母親を説得し、伯父の皇帝ユスティニアヌスの許可のもとに「名譽ある改嫁を果たした者は、貴顯なローマ市民とも正式に結婚出来る」と法律を変えさせたのである。

ユスティニアヌスとテオドラは、この法律制定後、速やかに式を挙げ、正式な夫婦となつた。

その後、ユスティニアヌスは、皇帝に即位すると、テオドラを対等の共治者として扱い、各属州の総督に対して、二人の名前を列記し忠誠を誓わせている。

都から離れた離宮で過ごした。入浴や美食を楽しみ、蓄財にも執心している。

また、彼女は、猜疑心も強く、多数の密偵を放つて自分に不利な行状や風聞を報告させ、彼女を批判する者は、投獄し拷問にかけた。そうしたことが世間の風評を呼び、彼女の評価を貶める原因となつた。

半面彼女は、遊芸や売春に身を落とさざるを得なかつた不幸な女性に対しては、温かい手を差し伸べている。

ボスボラス海峡の東側にあつた離宮を豪壮な修道院に改装し、首都の街頭や娼家から遊女を集め、相当の扶養費を出してそこで生活させている。

テオドラの知性については、ユスティニアヌス大帝も高く評価していた。彼が布告した法律の多くは、テオドラの助言を受けていたといわれている。

結婚後のテオドラは、「名譽ある改嫁」を果たし、キリスト教徒として貞節を守り続けた。彼女がユスティニアヌス大帝を愛していったのか、それとも妻としての義務と利益のために快楽を犠牲にするほどの克己心の持ち主であつたのかは明らかでない。

だが、ユスティニアヌス大帝は、彼女を心

から愛していたことは間違いない。

テオドラは、若い頃の貧困と放恣な生活がたたつたためか健康を害し、デルフォイの温泉施設で療養に努めた。この湯治のための旅行は、四千人の従者が従い、沿道が整備された。彼女自身も回復を祈願して、教会や修道院を建てたと伝えられている。

そのテオドラも結婚から二四年目、皇妃となつてから二二年目にして癌にかかり、五四年、波乱に満ちた生涯の幕を閉じた。

ユスティニアヌスは、テオドラを喪つた悲しみを振り払うかのように、ローマの奪還を目指した。五五三年、一八年間に及ぶゴート族との戦いに勝利し、イタリアを東ローマ帝国の版図に組み入れたのだ。

テオドラの死から一六年後の五六五年、ユスティニアヌス大帝は、財政危機に悩ましながら八三歳で永遠の眠りについた。

彼の死後、東ローマ帝国は、イスラームの脅威に晒され次第に衰退し、一四五三年、オスマントルコの攻撃を受け滅亡した。

自由執筆

版画「平家一門武者絵」を読む

諸橋 奏

「平家一門武者絵」と自称の版画（縦37cm×横25cm）を所蔵している。本刷り物で「五風亭貞虎画」銘がある。

貞虎は、江戸絵系歌川派、貞国（三代豊國）門下で、作画期は文政・天保（一八一八～四三）頃である。絵双紙挿絵・花鳥画・美人画――「東都七福詣」の美人画シリーズなどが知られている。版元は享保からの出版書肆「萬屋吉藏板」・「極」印がある。

「武者絵」は天保末頃から出現するが、「天保改革（一八一二）で演劇界の「役者絵」・遊里の「美人画」が制約されると、折からの旅行ブーム・読書ブームと相俟つて、「風景画」と共に人気が集まつた。

「平家一門武者絵」の人物は八名。構図は、右列上から小松内大臣重盛・無三四守知章・新中納言知盛・中列一安徳天皇・二位禪尼・建礼門院・左列一内大臣宗盛・能登守教経・平重盛（一一三八～七九）清盛の嫡男。一

門隨一の器量人で鹿ヶ谷事件の折、父を諫めた。健康を害し、清盛が薦めた医療も断り出家後没。画では烏帽子に鎧を脱いだ草摺姿で全開の日の丸鉄扇を持つ。

平知章（一一六九～八四）重盛の弟知盛の子。一の谷の合戦で父の窮地を救い、自らは討死。享年十六歳。画では甲冑に身を固め、左脇下に弓掲い込みの姿。

平知盛（一一五二～八五）清盛の四男。兄宗盛の片腕として一門を指揮、壇ノ浦の戦い（元暦二～文治元（一一八五）年三月二十四日）では「見るべき程の事は見つ」と從容として入水。画では引立烏帽子に鎧姿で大長刀を抜く。

安徳天皇（一一七八～八五）高倉天皇と清盛の娘徳子の皇子。言仁親王。一年三か月で即位。壇ノ浦で入水。享年八歳。画では垂髪姿で二位尼に捧げ抱かれている。

平時子（一一二六～八五）清盛の妻。二位尼。壇ノ浦で孫の安徳天皇を抱き、宝剣を持つて入水と伝承。画は天皇を左手で高く抱き上げ、御高祖頭巾姿で微笑。

平徳子（一一五五～一二一三）清盛と時子の娘。建礼門院。十七歳の時、六歳年下の高倉天皇の后となる。壇ノ浦で入水したが源氏

方に救われ、三十一歳で出家。寂光院で一門盛没後平家の総領。壇ノ浦では義経を追いやったが逃げられ、源氏方の安芸兄弟を両脇に入水。享年二十六歳。画では引立烏帽子鉢巻姿で弓を立て見得を切る。

この集合画は平家一門の最絶頂時「安徳天皇の誕生」の喜びを描いたもの。二位尼と建礼門院の微笑がそれを物語っている。そして一方で天皇誕生の治承二年十一月から僅かの翌年五月に病を得て出家、七月に没した重盛も登場させている。以後一門は滅亡の道を辿ることとなる。短い華やかなの裏に隠された悲劇『平家物語』の主題「諸行無常・盛者必衰」が、一門から選ばれた八名の「生と死」に凝縮されている「平家一門武者絵」。

そこには更に江戸庶民の権力者への風刺心、慘死、憤死、夭死した平家の公達への哀憐の情（清盛を除く）などを感じるのである。